

## 位置有感型比例計数箱 PS-TEPC フライトモデルの開発

## Development of the flight model of PS-TEPC

高エネルギー加速器研究機構(KEK)<sup>1</sup>, 慶応義塾大学<sup>2</sup>, 神戸大学<sup>3</sup>, 宇宙航空研究開発機構(JAXA)<sup>4</sup>,  
京都大学<sup>5</sup>, 放射線医学総合研究所<sup>6</sup>, 早稲田大学<sup>7</sup>

○岸本 祐二<sup>1</sup>, 佐々木 慎一<sup>1</sup>, 高橋 一智<sup>1</sup>, 齋藤 究<sup>1</sup>, 寺沢 和洋<sup>2</sup>, 身内 賢太郎<sup>3</sup>,  
布施 哲人<sup>4</sup>, 永松 愛子<sup>4</sup>, 勝田 真登<sup>4</sup>, 伊藤 裕一<sup>4</sup>, 松本 晴久<sup>4</sup>, 森 國城<sup>4</sup>, 谷森 達<sup>5</sup>,  
窪 秀利<sup>5</sup>, 内堀 幸夫<sup>6</sup>, 北村 尚<sup>6</sup>, 道家 忠義<sup>7</sup>

High Energy Accelerator Research Organization(KEK)<sup>1</sup>, Keio Univ.<sup>2</sup>, Kobe Univ.<sup>3</sup>,  
Japan Aerospace Exploration Agency(JAXA)<sup>4</sup>, Kyoto Univ.<sup>5</sup>,  
National Institute of Radiological Sciences<sup>6</sup>, Waseda Univ.<sup>7</sup>,

○Yuji Kishimoto<sup>1</sup>, Shin-ichi Sasaki<sup>1</sup>, Kazutoshi Takahashi<sup>1</sup>, Kiwamu Saito<sup>1</sup>, Kazuhiro Terasawa<sup>2</sup>,  
Kentaro Miuchi<sup>3</sup>, Tetsuhito Fuse<sup>4</sup>, Nagamatsu Aiko<sup>4</sup>, Masato Katsuta<sup>4</sup>, Yuichi Ito<sup>4</sup>,  
Haruhisa Matsumoto<sup>4</sup>, Kunishiro Mori<sup>4</sup>, Toru Tanimori<sup>5</sup>, Hidetoshi Kubo<sup>5</sup>,  
Yukio Uchihori<sup>6</sup>, Takashi Kitamura<sup>6</sup>, Tadayoshi Doke<sup>7</sup>

E-mail: [yuji.kishimoto@kek.jp](mailto:yuji.kishimoto@kek.jp)

我々は宇宙機船内における空間線量計としての利用を考えた位置有感型比例計数箱(PS-TEPC)の開発を行っている。宇宙滞在によって受ける放射線被ばくは地表より 2 オーダーも高く、宇宙飛行士の滞在期間は生涯滞在被ばく線量によって制限されている。そのため、線量計測器の測定精度が低い場合には宇宙飛行士の滞在期間に必要な以上の制限を与えることになる。宇宙放射線による被ばく線量は通常、LET (Linear Energy Transfer) の関数として与えられる線質係数と吸収線量との積で表される線量当量により評価される。国際宇宙探査協働グループ (ISECG) によって長期ビジョンとして打ち出されている月面や小惑星への有人探査を考えると、これらのパラメータを高い精度でモニターする線量計が必要となることは想像に難くない。また、前述の精度要求に加えて、宇宙機器へのリソース要求 (電力、重量、スペース) と宇宙環境を考慮した応答要求 (複数の線質に対する感度、広い LET レンジ) 等の搭載性能が要求される。

PS-TEPC は  $\mu$ -PIC と呼ばれるピクセル型電荷読み出しデバイスを用いた有感体積  $26 \times 26 \times 50 \text{mm}^3$  の Time Projection Chamber であり、入射放射線のガスに対するエネルギーデポジットだけでなく 3 次元飛跡を取得することが可能である。3 次元飛跡からは 1 イベント毎の飛跡長を見積もることができるため、LET を精度良く求めることができるのが最大の特徴である。

PS-TEPC は既に国際宇宙ステーション日本モジュール「きぼう」船内実験室第二期利用後半期間科学分野候補として採択され、2015 年には機上へ搭載し動作実証試験を行う予定である。現在はフライトモデルの開発を進めると共に、フライトモデル試作機を用いた性能評価を進めている。本講演ではフライトモデルの構成を示し、試作機における性能評価の結果について述べる。